

しおがままちあるき Bonvenon al Shimono! 芭蕉が歩いた塩竈

所要時間
100分
(見学時間含む)



日本で最も有名な俳諧師のひとりとされている松尾芭蕉。芭蕉が弟子の曾良を伴い、江戸深川から東北、北陸を巡り、岐阜大垣まで旅した名紀行文『おくのほそ道』はあまりにも有名です。芭蕉と同じルートでこの塩竈の地を歩いてみたら、きっと芭蕉が見た塩竈の景色があなたの目の前にも広がります。



芭蕉が実際に歩いた道のり(実際は2日に分けて塩竈を歩いた)



① 御釜神社

鹽竈神社の末社。鹽竈神社別宮と同じ祭神である鹽土老翁神(しほつちおぢのかみ)をお祀りしています。『塩竈』と言う地名の由来となった四口の『神釜』が安置され、鹽土老翁神が人々に製塩の方法を教えた釜と伝えられています。またこの神社では、毎年7月に全国でも希な古代製塩を伝承する祭礼『藻塩焼神事』が行われています。

☆元禄2年5月8日(1689年、陽暦6月24日)、仙台を発った芭蕉は午後2時頃塩竈に到着。食事の後、この御釜神社に立ち寄りしました。芭蕉も見たとされている神釜を見まじょう!(拝観料 100円)
【奥の細道300年記念碑あり】

② 芭蕉止宿の地 宿『治兵衛』

芭蕉と曾良が泊まった宿『治兵衛』があったとされる場所。かつてこの一帯には鹽竈神社の別当寺『法蓮寺』がありました。しかし、明治維新後起こった廃仏毀釈運動により明治3年(1870年)廃寺となり、書院であった『勝画楼』以外はすべて取り壊されました。

☆御釜神社を訪れた後、野田の玉川、末の松山等歌枕の地を巡った芭蕉一行は、法蓮寺前の宿『治兵衛』に泊まったとされています。『勝画楼』は宿のすぐ近くだったので、芭蕉も見たとされています。(外観のみ見学可能)
【奥の細道300年記念碑あり】

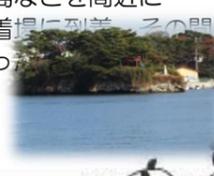


籬(まがき)が島・・・古来名島として歌枕に詠まれる周囲約155mの小さな島。鹽竈神社十四末社の一つ曲木(籬島明神)神社が祀られています。芭蕉も感慨深く通り過ぎて行きました。

⑥ 塩釜港

芭蕉が望んだ塩竈の浦(千賀の浦)を眺めてみてください。遊覧船や市営汽船に乗ると、まもなく左手方向に籬が島(まがきがしま)が見えてきます。その景観に、芭蕉も深く感動したといわれています。

☆塩釜湾内に漕ぎ出した芭蕉一行は、籬が島、内裡島、都島、鏡島、在城島などを間近に眺めながら進み、松島の船着場に到着。その門2里(1里は4km)ほどだと記録されています。



⑤ 芭蕉 船出の地

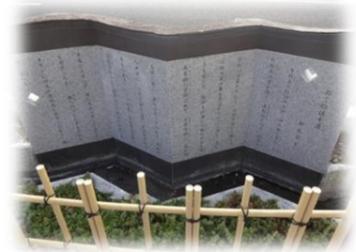
芭蕉が船で松島へと発った場所。現在では塩竈の老舗『太田與八郎商店』のあたりです。かつてこの一帯は海岸線でしたが、昭和30年代の埋め立てにより、『芭蕉船出の地』は現在の海岸線から500m程離れた場所に位置しています。

☆元禄2年5月9日(1689年、陽暦6月25日)鹽竈神社を参拝した芭蕉一行は、屋近くに船を借り、松島へと向かいました。
【奥の細道300年記念碑あり】



④ 『おくのほそ道』石碑

メインストリートである『鹽竈海道』沿いに立つ石碑。芭蕉が記した紀行文『おくのほそ道』から一部抜粋し、石碑に刻みしました。



③ 鹽竈神社境内 文治の神燈

文治3年(1187年)7月10日に、奥州藤原氏第三代藤原秀衡の三男・忠衡が奉納したものです。忠衡の行いは『おくのほそ道』で“彼は勇義忠孝の士也。”と讃えた松尾芭蕉をはじめ、多くの人々に感動を与えました。この神燈は、父・秀衡の遺志を継いで、自分の命に代えてでも義経を守るという誓いを込め、奉納されたものです。

☆元禄2年5月9日(1689年、陽暦6月25日)の快晴の朝、芭蕉は鹽竈神社を参拝。その際この神燈に出会い、深く感銘を受けたと『おくのほそ道』に記されています。
【奥の細道300年記念碑あり】

